

「高田畊安(たかたこうあん)と南湖院(なんこいん) ～東洋一のサナトリウムと茅ヶ崎」企画展を見て

結核予防会

代表理事 石川 信克



茅ヶ崎ゆかりの人物館(神奈川県茅ヶ崎市)外観

2017年10月から2018年3月まで、茅ヶ崎市主催による上記企画展が「茅ヶ崎ゆかりの人物館」にて開かれた。「南湖院」は茅ヶ崎市南湖に存在した結核療養所で、1899(明治32)年開設され、1945(昭和20)年の終戦前に海軍によって接収されるまで維持され、東洋一のサナトリウムと称されていた。この企画展は、創始者である医師高田畊安の生涯と思想に迫るとともに、約5万坪にも及ぶ広大な敷地で、茅ヶ崎市の発展に大きな影響を与えた南湖院の全容をひもとく狙いがあった。高田畊安の学的知識と思想、幅広い交友関係が詳しく紹介され、手記や写真、催し物の映像などが豊富に展示された。(南湖院に関しては、本誌337号(2011.1)に一部紹介されている。)

高田畊安の生涯と思想



高田畊安

高田畊安(1861-1945)は京都府の出身、府立医学校で学び、さらに帝国大学医科大学(現東大医学部)を卒業、内科医としてベルツから薫陶を受けた。京都時代、医学の学業半ばで結核により他界した兄や新島襄の影響でキリスト教に入信した。当時学んだ最先端の医学と固い信仰が結び付き、南湖院開設という一大事業が成し遂げられた。大学病院では、診療の傍らツベルクリンや腸チフス、天然痘の研究に携わり、青山胤通や北里柴三郎らが香港で実施したペスト調査にも参加している。自らも結核に罹患し転地療養で回復した。1896年神田駿河台に東洋内科医院を開設、その分院として結核患者のための南湖院を設立した。1911年8月に国際結核病学会出席のためにロー

マに赴くが、当地でのコレラ発生により学会が1年延長となり、そのままベルリン大学に留学する機会ができた。帰国後、畊安は精力的に東京と茅ヶ崎を往復し、ほとんど休みも取らずに患者の治療にあたったという。畊安は身体の治療だけでなく、魂の救いをも目指すという両方の役割を担う楽園を目指していた。

茅ヶ崎が町として発展する中で、南湖院への反対運動もあったが、畊安の信念が揺らぐことは無かった。1943年には、結核予防の功労者として皇后からの下賜品も授与された。畊安は1945年2月、医王堂で一時間あまりの説教中に倒れ、そのまま84歳の生涯を閉じた。

南湖院のはたらき



旧第一病舎

明治中期から大正、昭和にかけて結核は死亡の第一位で、死亡率は人口10万対200を超える状態が1945年の終戦まで続いた。積極的な近代的治療法は無く、大気、安静、栄養を中心とした自然治療法が主であり、その一つがサナトリウム(療養所)での療養であった。ベルツやコッホの勧めもあり、畊安は理想的なサナトリウムの建設を目指した。

南湖院は、広大な敷地に建物は4千5百坪で、水道は敷地内の井戸から汲み上げたものを利用、水質は東京衛生試験所からの検定を受けた。水洗便所と汚水浄化装置を備えて、衛生面でも最先端であり、サナトリウムとして東洋一の規模であった。結核治療と密接な関わりがあるという理由で気象観測を行う測候所も設けた。他の療養所に比べて亡くなる患者の数も少なく、優れた療養環境を見学するために多くの医療関係者が訪れたという。病室は158室、他に日光浴場、外気

に触れる海気室，医王堂（礼拝堂を兼ねた大集会室），理髪所，売店などがあつた。医王堂には，国内で初期に製造された足踏み式リードオルガンが置かれ，日曜日や集会毎に賛美歌が弾かれたらしい。そこでは入院患者の慰安会のほか，映写会も開かれ，近隣の住民を招待，地域とのつながりも大切にされた。展示では，創立30周年記念・第29回医王祭（1929年12月25日実施クリスマス祝会）の記録無声映画の貴重な映像も映され，浜辺の会場での来賓や地元の人たちの当時の様子を垣間見ることができる。甘酒や焼き芋を楽しむ人々も映されている。徳富蘇峰ら有名人が来賓挨拶をする場面もある。気腹器や当時のポスターなど結核研究所提供の資料も展示されていた。



入院患者の治療は，海浜の清浄な空気の中で規則的で安静な日課をこなすことによって自然の回復を目指す。朝4時半起床，検温，6時朝食，9時半散歩，10時半検温，11時半昼食，1時半散歩，2時半検温，3時半散歩，5時夕食，6時検温，入浴，7時半冷摩擦，8時就寝という日課であった。院内心得には，外出時は携帯用痰壺または痰袋を携帯し喀痰はこの中に入れることなども書かれている。食事も毎朝，卵や牛乳がつく栄養十分な内容であった。入院料は4ランクに分かれ，1939年では一日当たり個室で8円から4円，2人部屋で3円であった。米10キロが3円25銭程度であった時代，高額な入院料を払える人は限られていたが，多くの療養所に比べ特に高くなかったという。病院外に下宿し，外来治療を受けていた患者も多かった。

南湖院をめぐる人々

展示室に付随する多目的館では，南湖院に入院または見舞いに訪れ，茅ヶ崎に影響を与えた人々が紹介されていた。南湖院開設時，第一病舎一棟のみで入院患者3人であったが，一人は勝海舟夫人であった（畹安夫人は勝海舟の孫の輝子さん）。患者で主な人としては，南湖院で亡くなった作家の国木田独歩（享年37歳），詩人の八木重吉（享年30歳，10年後，娘の桃子が14歳，息子の陽二が15歳で結核死），入院生活を送った坪田譲治，中山介山らの小説家，随筆家で参議院議員の森田たまがいる。女性解放運動家の平塚らいてうは，姉や社員の入院，洋画家で恋人の奥村博史の発病などのため茅ヶ崎に住み，「青鞥」の編集など南湖院

を中心に仕事をした。琵琶湖周航の歌の作曲者の吉田千秋，キリスト教界の指導的牧師で，同志社総長も務めた小崎弘道は家族が治療を受けて深い繋がりがあつた。短期の治療で快癒した牧師の柏木義円など様々な文化人が南湖院の恩恵に浴した。柏木は，南湖院を営利的事業でなく，高田畹安の慈善的道楽の事業と評している。

現代的意義



南湖院海浜会場（茅ヶ崎海岸）で衛生講話を行う高田畹安

有効な薬物療法に基づく近代的な結核治療が開発される前，サナトリウムでの治療で多くの患者のケアをし，命を救った南湖院と医師高田畹安の果たした歴史的事実に目を見張る。終戦後，閉鎖のやむなきに至つた時，入院患者は平塚の杏雲堂分院，東村山の結核予防会保生園（現新山手病院）に移されたという。結核予防会とも細い糸で結ばれていたのである。

その後，南湖院の広大な土地の一部は西浜中学，西浜高校が建設され，有料老人ホーム「太陽の郷」が畹安の孫の高田準三医師により創設された。その一部は茅ヶ崎市に寄贈され，旧第一病舎などの建物を含む「南湖院記念太陽の郷庭園」が市と，太陽の郷の現経営母体の一般社団法人南湖荘の共同管理下で一般公開されている。今回の展示資料の一部は，今後この旧第一病舎内に展示される予定と聞く。南湖院開設以来100年以上の時が経過した今，一人の医師の堅い信仰と信念に基づく社会事業の発展と多くの人々を病からの解放した歴史，周辺のみちづくりへの貢献など，施設解散後も後世への遺産として語り継がれる価値があると思われる。☘

【資料】

- ・茅ヶ崎市史編集委員会編 茅ヶ崎市史ブックレット5「南湖院—高田畹安と湘南のサナトリウム」平成29年
- ・茅ヶ崎市史編集委員会編 市制施行70周年記念 茅ヶ崎を彩つた70人 ゆかりの人物でたどる歴史風土 平成29年
- ・とことこ湘南：映像と音楽から，南湖院の歴史に触れる <http://www.shonan-sh.jp/columns/1053>
- ・本稿の写真は，茅ヶ崎市，島尾真氏，一般社団法人南湖荘らの提供による